手紙　二

宮沢賢治

印度(インド)のガンジス河(がわ)はあるとき、水が増(ま)して烈(はげ)しく流(なが)されていました。

それを見ている沢山(たくさん)の群集(ぐんしゅう)の中に尊(とうと)いアショウカ大王も立たれました。

大王はけらいに向(むか)って「誰(だれ)かこの大河(たいが)の水をさかさまにながれさせることのできるものがあるか」と問(と)われました。

けらいは皆(みな)「陛下(へいか)よ、それはとても出来ないことでございます」と答えました。

ところがこの河岸(かわぎし)の群(むれ)の中にビンズマティーと云(い)う一人のいやしい職業(しょくぎょう)の女がおりました。大王の問(とい)をみ

んなが口々に相伝(あいつた)えて云(い)っているのをきいて「わたくしは自分の肉を売って生きているいやしい女である。けれども、今、私のようないやしいものでさえできる、まことのちからの、大きいことを王様(おうさま)にお目にかけよう」と云いながらまごころこめて河にいのりました。すると、ああ、ガンジス河、幅(はば)一里(り)にも近い大きな水の流れは、みんなの目の前で、たちまちたけりくるってさかさまにながれました。

大王はこの恐(おそ)ろしくうずを巻(ま)き、はげしく鳴る音を聞いて、びっくりしてけらいに申(もう)されました「これ、これ、どうしたのじゃ。大ガンジスがさかさまにながれ

るではないか」

人々は次第（しだい）をくわしく申し上げました。

大王は非常（ひじょう）に感動（かんどう）され、すぐにその女の処（ところ）に歩いて行って申されました。

「みんなはそちがこれをしたと申しているがそれはほんとうか」

女が答えました。

「はい、さようでございます。陛下（へいか）よ」

「どうしてそちのようないやしいものにこんな力があるのか、何の力によるのか」

「陛下よ、私のこの河をさかさまにながれさせたのは、

まことの力によるのでございます」

「でもそちのように不義(ふぎ)で、みだらで、罪深(つみふか)く、ばかものを生けどってくらしているものに、どうしてまことの力があるのか」

「陛下よ、全(まった)くおっしゃるとおりでございます。わたくしは畜生同然(ちくしょうどうぜん)の身分(みぶん)でございますが、私のようなものにさえまことの力はこのようにおおきくはたらきます」

「ではそのまことの力とはどんなものかおれのまえで話してみよ」

「陛下よ。私は私を買って下さるお方には、おなじく

つかえます。武士族の尊いお方をも、いやしい穢多をもひとしくうやまいます。ひとりをたっとびひとりをいやしみません。陛下よ、このまことのこころが今日ガンジス河をさかさまにながれさせたわけでございます」

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
　　１９９６（平成８）年６月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　１９９５（平成７）年５月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
２００９年７月16日作成
２００９年８月15日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。